

音象徴と類像性 — 英語語頭子音 *gl-* —

高橋 順一

1. はじめに

英語には、音声＝意味的類似性が見出される例がある。例えば、次の代名形式 (pronominal) の単語や否定語 (negative) の語頭の子音に関して、互いに類似した一音節の語根が含まれていると考えられる。

[ð —] : *the, this, that, then, there, thith-er, thus.*

[n —] : *no, not, none, nor, nev-er, neith-er.*

このような言語現象は、従来、一般に、音象徴 (sound-symbolism) と呼ばれ、音声と意味の関連性は無縁 (motiveless) で予測不可能な (unpredictable) 恣意性 (arbitrariness) を持つとされてきた¹。また、この恣意性はソシュール (Ferdinand de Saussure) 以降、記号の恣意性として、現代言語学の重要な基本原理とされてきた。本稿では、音象徴が恣意性を持つのではなく、むしろ、反対に、音声と意味が動機付けされた (motivated) 類像性 (iconicity) を持つことを明らかにしたい。

2. 音象徴 (sound-symbolism) とは何か。

まず、音象徴の定義を David Crystal (2003:424) から引用する。

Sound-symbolism(n.) A term used in SEMIOTICS and LINGUISTICS to refer to a direct association between the FORM and the MEANING of LANGUAGE: the sounds used reflect properties of the external world, as in case of onomatopoeia (e.g. *cuckoo, murmur, crash*) and other forms of SYNAESTHESIA (e.g. *sl-* in such words as *slimy, slither*)

上述の定義から、音象徴は、オノマトペ (onomatopoeia) 擬音・擬態語や共感覚 (synaesthesia) における言語形態と意味の直接的連想であり、外界の特質を反映する音であると定義されている。しかし、クリスタルは、触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚の五感にかかわる広義の「共感覚」を用語として用いて、この場合、例示された用語から適切とは言えない。例からすると概念を限定した音感覚 (phonaesthesia) (Lyons, 1977:104) が音象徴の用語としてふさわしいと言える。いずれにせよ、音象徴を音形と意味が直接に結合した言語現象と定義とする。次に、音象徴を幅広くとらえ、単語間の象徴的意味を比較言語学的見地から詳細に検討しているイエスペルセンの例を見る。

2. 1 Jespersen (1922 : 396-411)

イエスペルセン(1922)は、音象徴について、第22章から16頁にわたって、sound symbolism を § 1. Sound and Sense. § 2. Instinctive Feeling. § 3. Direct Imitation. § 4. Originator of the Sound. § 5. Movement. § 6. Things and Appearances. § 7. States of Mind. § 8. Size and Distance. § 9. Length and Strength of Words and Sounds. § 10. General Considerations. § 11. Importance of Suggestiveness. § 12. Ancient and Modern Times. の項目に従って、詳細に述べている。これほど音象徴の本質について述べられている文献は後世に類を見ない。§ 5. では、音と移動の意味を象徴するものとして、fl- : *flow, flag, flake, flutter, flicker, fling, flit, flurry, flirt* ; sl- : *slide, slip, slive* ; gl- : *glide*, 音と視覚の意味関係を持つ *totter, dodder*, 手や歯による物の把握と音との関連を持つ *snap, snack, snatch, catch* 等の例を挙げている。イエスペルセンは、明暗と音声の関係を捉え、母音 [i] は light、母音 [u] は dark の関連性が、*gleam, glimmer, glitter* と *gloom* との対比に見られると言う (p.401)。(light の i は、現代英語では二重母音 [ai] であるが、古期英語ではドイツ語 *licht* と *dunkel* のように母音 [i] であった。) さらに、§ 8 では、母音 [i] は、狭い、細い、弱い、薄いなどの意味を表すとして、*little, petit, piccolo, piccino*, マジャール語 *kis*, 英語 *wee, tiny, slim* を挙げている。この事実は、以下の子供を意味する各国語、例えば、英語 *child* (以前は [i] 音を持つ) *, kid, chit, imp, slip, pigmy, midge*, ドイツ語 *kind*, デンマーク語 *pilt*, スペイン語 *chico* に見られる。以上、イエスペルセンの音象徴の例を部分的ではあるが見てきた。最後に、§ 10 一般的考察における音象徴を正しく評価する上での考慮すべき3点を引用する (Jespersen, 1922 : 406)。

- (1) No language utilizes sound symbolism to its full extent, but contains numerous words that are indifferent to or may even jar with symbolism.

(いかなる言語も十分には音象徴を利用してはいない。しかし、音象徴に関係しなかったり、合わない多くの語がある。)

すなわち、母音 [i] は「小」を意味することが多いが、*big - small, thick - thin* 等の例外がある。

- (2) Words that have been symbolically expressive may cease to be so in consequence of historical development, either phonetic or semantic or both.

(象徴語は歴史的発達の結果、音声的、意味的あるいは両方の面から、象徴的でなくなることもある。)

すなわち、「からす」の *crow* は、古期英語の *crawe* (デンマーク語 *krage*, オランダ語 *kraai*) ほど鳴き声とは似ていない。

- (3) On the other hand, some words have in course of time become more expressive than they were at first ; we have something that may be called secondary echoism or secondary symbolism.

(象徴語には最初の時よりも一層象徴的になる語がある。それは二次オノマトペである)

いは二次音象徴と呼ばれる。)

すなわち、動詞 *patter* は *pater* (= *paternoster*) に由来するが、最初は祈りを繰り返す意味であったが、同音異義動詞の *patter* (= *pats* の連続) と結びつき、その後、*prattle*, *chatter*, *jobber* などの擬音語の影響を受けた。*patter* [pætə(r)] が日本語で「パタパタと走る」、「パタパタという音」の意味をもち、音が似ている。

2. 2 Bloomfield (1933 : 245)

英語には、象徴的形式として、通常の言語形式よりも直接的に意味を連想させる例があるとして、次のような語頭子音、象徴的意味、具体例を挙げている。

- [fl-] ‘moving light’ : *flash, flare, flame, flick-er, flimm-er*.
(「動く光」: ぴかっと光る、パットと燃える、炎をあげて燃える、ちらちらする、ちらつく)
- [fl-] ‘movement in air’ : *fly, flap, flit (flutt-er)*.
(「空中の運動」: 飛ぶ、はためく、ひらひら飛ぶ(羽ばたきする))
- [gl-] ‘unmoving light’ : *glow, glare, gloat, gloom (gleam, gloam-ing, glimm-er, glint)*
(「動かぬ光」: 白熱して輝く、きらきら光る、満足して眺める、憂鬱になる(かすかに光る、薄明かり、ちらちら光る、きらきら光る))
- [sl-] ‘smoothly wet’ : *slime, slush, slop, slob-er, slip, slide*.
(「ぬれて滑らか」: ぬるぬるになる、雪解け;ぬかるみ、ぼとぼとこぼす、よだれをたらす、つるっとすべる、なめらかにすべる)
- [kr-] ‘noisy impact’ : *crash, crack (creak), crunch*.
(「やかましい衝突」: 大きな音を立ててぶつかる、バンと音を立てる(キーキー鳴る)、ボリボリかむ)
- [skr-] ‘grating impact or sound’ : *scratch, scrape, scream*.
(「きしるような衝突または音」: ひっかく、こする、かなきり声を出す)
- [sn-] ‘breath-noise’ : *sniff (snuff), snore, snort, snot*.
(「息による音」: くんくんかぐ(鼻から吸う)、いびきをかく、鼻を鳴らす、鼻汁)
- [sn-] ‘quick separation or movement’ : *snap (snip), snatch (snitch)*.
(「急速な分離または運動」: パチンと音を立てる(ちよきんと切り取る)、ひったくる(盗む))
- [sn-] ‘creep’ : *snake, snail, sneak, snoop*.
(「はう」: くねって歩く、カタツムリ、こそこそ動く、こそこそ詮索する)
- [d -] ‘up-and-down movement’ : *jump, jounce, jig (jog, jugg-le), jangle (jingle)*.
(「上下運動」: はねる、上下にガタガタ揺れる、上下に動かす(揺れながら

進む、手品をする)、ジャンジャン鳴る (チリンチリンと鳴る))

[b-] ‘dull impact’ : *bang, bash, bounce, biff, bump, bat.*

(「鈍い衝突」: バタンとたたく、強打する、弾む、ぴしゃっと打つこと、ドンと当たる、バットで打つ)

このように、象徴的単語 (symbolic words) の語頭音には、音声=意味の類似性があり、強意的 (intense)、象徴的含意があると言える。なお、このような現象は語頭だけでなく、語末にも見られるが具体例は省略する。

2. 3 Ullmann (1962: 84)

ウルマンは、意味的観点から、音声的動機付け (phonetic motivation) を一次的オノマトペと二次的オノマトペに区分し、音象徴を二次的オノマトペと呼んでいる。この二次的オノマトペは聴覚的経験だけでなく、運動やなんらかの身体的あるいは善悪判断の特性を連想させるとして、以下の例を挙げている。

movement (運動) ・ ・ ・ *dither* (うろたえる)、*dodder* (よろよろ歩く)、*quiver* (ぶるぶる震える)、*slink* (こそこそ歩く)、*slither* (びくびくする)、*slouch* (前かがみになる)、

squirm (身をよじる)、*wriggle* (びくびくする)

physical or moral quality (身体的あるいは善悪判断特性) ・ ・ ・ *gloom* (顔をしかめる)、*grumpy* (機嫌の悪い)、*mawkish* (吐き気をおこさせるような)、*slatternly* (だらしなく)、*slick* (すべすべした)、*slimy* (ねばねばした)、*sloppy* (びしょびしょの)、*sloth* (ものぐさ)、*slovenly* (だらしない)、*sluggish* (不精な)、*wry* (顔などがしかめられた)

ウルマンは、このような二次的オノマトペは、フランス語 (*craquer* ‘crack, crackle’ — *croquer* ‘scrunch’, *siffler* ‘whistle’ — *souffler* ‘blow’, ハンガリー語 (*dong* ‘buzz’ — *dong* ‘resound’, アフリカ諸語のイディオムにも見られると言う。(Ullmann, 1962:84)

2. 4 Lyons (1977: 104)

ライオンズは、ウルマンの二次的オノマトペに相当する用語として、二次的類像性 (secondary iconicity) を用い、類像性を形態と意味の類似性として捉え、非恣意的 (non-arbitrary relationship) が音象徴であると考えている。この類像性がアメリカの哲学者、論理学者、数学者パース (Peirce 1982-93) の言語記号としての3つのカテゴリーである類似記号 (icon)、指標記号 (index)、象徴記号 (symbol) の1つに基づいている。類似記号は言語レベルでは、擬声語、手話の一部と考えることができる。ライオンズは、ウルマン (1962:84) の例を引用しているが、独自の具体例は明示していない。

音象徴については、Jespersen (1922:400), Crystal (1995:250-253) 等で多くの具体例が示さ

れているので、これ以上、言及しない。次に、音象徴が類像性の視点からなぜ重要であるかを考えてみる。

3. 音象徴と類像性

恣意性に対立する概念が「有縁性」又は「有契性」である。(有縁性／有契性 (motivation) は類像性 (iconicity) と厳密には異なる概念であるが、ここでは同義に扱う。) 従来、擬音語だけが恣意性の例外としてみとめられていたが、認知言語学のパラダイムでは、より積極的に有縁性という観点から言語現象を見直すことによって、「言語が、なぜ、そのような姿をしているのか」という問に解答を出すことができると期待されている。また、言語理論における有縁性の概念は、ハイマン (Haiman, 1980) が類像性を 2 分したものの 1 つで、有縁性には記号と対象の間に類似性が認められること、記号が意味 (概念) をある程度まで直接的に反映することが、認知言語学での「意味と形式の一一対対応」の基本原理を支持する極めて重要な鍵になっていることが指摘されている (詳細は辻 幸夫編「認知言語学キーワード事典」参照)。音象徴の言語現象に何らかの有縁性／類像性が音声の調音音声学、音響音声学の視点から見出されれば、大げさに言えば、新たな言語学の新知見を得ることになるであろう。

3. 1 英語語頭子音 *gl-* をもつ語の多義性

さまざまな音象徴の具体例の中でも、多くの研究者に共通に取り上げられている語頭子音 *gl-* について考えてみる。Sadowski (2000:76) は、OED (1989) から、語頭 *gl-* で始まる 47 の単語を次のように 10 の意味領域に分類している。

表 1 英語語頭子音 *gl-*

No	Meaning	Lexical Items	Number
1	Light, brightness	<i>glad, glade, glaik, glance, glare, glass, gleam, glee, glead, gleg, glent, glimmer, glisten, glitter, glow</i>	15
2	Looking, seeing	<i>glance, glare, glent, glint, gloat, gloom, glower, glut</i>	8
3	Moving lightly	<i>glace, glaive, glance, glent, glide, glint, glissade</i>	7
4	Deceiving	<i>glaik, glaver, gleek, glib, gloze</i>	5
5	Dark light	<i>gloom, gloom, glower, glum</i>	4
6	Smoothness	<i>glaborous, gleg, glib, glossy</i>	4
7	Slimy substance	<i>glair, gleet, glue</i>	3
8	Joy	<i>glad, glee</i>	2
9	Splendor	<i>glamour, glory</i>	2
10	Miscellaneous	<i>glack, glen, gladiator, gland, gleam, glebe, gleg (prudence), gloss, glove, gluttony</i>	10

サドウスキ (2000:76) は、語頭子音 *gl-* がもつ象徴的意味を 10 に区分し、光、明るさ、見ること、軽い移動の意味をプロトタイプの意味領域にしている。語頭子音 *gl-* の意味は「光」をプロトタイプとして、多義性ネットワークで説明することができる。「見ること」、「暗い光」、「軽く移動すること」、「喜び」、「豪華さ」、「どろどろ状態」、「なめらかさ」、「だますこと」の意味は、新グローバル英和辞典第 2 版 (2001、三省堂) *light* の項目によると、次のような多義性をもち、() 内の具体的意味を説明することができる。

light 1 — 光、日光 (= 「光線、日光」)、日光のある間 (= 「日中、昼間」)、日の当たる場所 (= 「明るい場所」)、光の取り入れ口 (= 「窓 (ガラス)」)、光を放つもの (= 「明かり、灯火、電灯」)、光 > 火 (= 「点火物、火」)、精神的な光 (= 「光明、知識」)、解明の光 (= 「手助け」)、光の当て方 (= 「見方、見解」)、*light* 2 目方の少ない (= 「軽い」)、分量の少ない (= 「少量の」)、軽い > 弱い (= 「軽微な」) 負担の軽い (= 「楽な」)、動きの軽い (= 「軽快な」)、軽やかな (= 「ほっそりした」)、ふわふわした (= 「軽率な、浮ついた」)

ただ、「だますこと」(*deceiving*) については、*light* 2 の最後の意味である「ふわふわした」 (= 「軽率な、浮ついた」) と意味的に密接な関連性があると考えられる。

3. 2 英語語頭子音 *gl-* の類像性

Crystal (1995:250-253) は、音と意味の関連性をもつ語頭子音として、[s-] で始まる [sl-] 下方移動、方向、位置: *slack, slalom, slant, slash, slaughter, slave, slender, slice, slide, slight, slim, slip, slit, slither, slope, slot, slouch, slow, sluggish, sluice, slump*, さらに、[sn-], [sw-], 側音 (laterals) として、[gl-] 明るさ、光: *glamour, glare, glass, glaze, gleam, glimmer, glimpse, glint, glisten, glitter, globe, glossy, glow*, さらに、[-l], 語末子音として、[-ʃ], [-p], [-b] を列挙している。ここで、語頭子音 *gl-* は、調音音声学的には、有声軟口蓋閉鎖音 (voiced velar stop) [g] と有声歯茎側音 (voiced alveolar lateral) [l] からなるが、[gl-] が音と意味の類像性 (iconicity) の結果であるのかどうか、さらに、[gl-] は言語に特有の現象なのか、あるいは、普遍的現象なのかを以下で検討してみる。

すでに、英語には音象徴に関して、音声的に分類できる単語がかなりあることを見た。例えば、いくつかの言語で、狭母音 [i] は、小さいこと、近さを連想させ、日本語「母」は多くの言語では鼻音で表し、日本語「父」は調音位置が前方の子音で表す傾向があることが指摘されている²。なお、サドウスキ (2000:75) は、[g] 音が破裂性、[l] 音がなめらかな弾力性をもつことを確認している³。[g] の発音は、舌の奥、つまり後舌面を上げ、軟口蓋に押しつけ、それから軟口蓋から離す時、パッと息を出して発音する。この調音法は光が直進する時のイメージと一致する。さらに、Jacobson, Fant, & Halle (1965:43) における弁別的特性である [g] の集約性／拡散性も光のイメージを連想させる。次に、[l] の発音は、舌の先端を上唇の歯茎に触れるのではなく、押し当てて息を出し、その際、

息は舌の周りを抜ける。「l」の弁別の特徴は、Chomsky and Halle (1968) では、子音性、継続性、有声音性、前方性、舌頂性の5つである。この中の弁別的特性の1つである継続性も光の直進性のイメージを連想させる。このように、語頭子音 gl- がもつ類像性は、調音音声学的にも、音響音声学的にも動機付けられていると考えられる。井上 (2000:25) は、[fl-], [st-], [spr-] 等の語頭子音の結合は、単なる音感覚であるが、その音結合の示すイメージの中に意味との関連で何か共通の 'iconicity' (有契性) のようなものが感じられ、音声形式と意味の間に、何か相互に響き合って両者の結合を動機付ける「何か」があるように思われる、と述べている。例えば、[fl-]: *flag, fly, flow, flutter, float, flower, flush* 等は、「空間を動く物」のイメージ、[st-]: *street, stream, streak, strip, straight, straw, strand* 等は、「真っ直ぐで長い」イメージ、[spr-]: *spring, sprout, sprig, sprinkle, spread, spray* 等は、「内から外への経路」を経てひろがるイメージである。これらはいずれも、音声形式と意味の間に、ある種の音象徴のような有契性が見られる、と言う。さらに、井上 (2000:29-30) は、Rhodes, G. & J. Lawler (1981:318-342) の例を取りあげ、That {rings, sounds} true. において、'ring' の 'r-' は「不規則な周波数ながら緩やかな」開始音と '-ing' という「持続」を示す主要部との関係を音調曲線を用いて説明している⁴。'ring' と 'sound' の音調曲線を比較すると、'ring' は、「少し耳障りながら緩やかな開始」と「余韻の響く長めの語尾音」をもち、'sound' は、「急速な開始」と「歯切れの良い終結」をもつとし、この事実は、'ring' が「本当らしく聞こえる」という意味成立の背景となり、その全体的印象がゲシュタルト的にまとまって、意味を喚起する引き金になっている、と考えている。さらに、認知意味論的には、音声形式のもつ全体的ゲシュタルト構造が、参照点 (reference-point) となり、それとの類像関係を暗示する「真実らしく響くことの衝撃とその情動的重みが余韻として持続すること」を媒介とする意味の世界が、標的 (target) として喚起される、と説明している。この説明は、音声と意味の融合に基づく研究の可能性と類像性研究への多くの示唆的知見を持っているが、詳しい検討は今後の課題としたい。

3. 3 英語語頭子音 gl- の普遍性

英語語頭子音 gl- を含む音象徴が英語特有の現象なのか、それとも諸言語に見られる一般的普遍性を持つものなのかの検討は、大いに、興味をそそる。この問題の解明には、いくつかの言語における音象徴の対応関係を見ることによって、ある程度の傾向を知ることができる。

サドウスキ (2000:82) は、英語と同じゲルマン語派に属するアイスランド語には、英語とかなりの対応関係が見られることを指摘している。すなわち、'light', 'brightness', 'sight' に関連する語として、*glætr, glampi, glas, glap, gler, glit, glja, gloa, gloð, glora, glygg*, 'illusion', 'hallucination', 'image' に関連する語として、*glap, glamr, glika, joy, merriment* に関連する語として、*glaur, gleði, gleyma, glissa, glotta, gly* 等がみられる。このように、

英語語頭子音 *gl-* がいかに、アイスランド語と密接に対応しているかがわかる。この類似した対応関係は、オランダ語、ノルウェー語、ドイツ語、デンマーク語などのゲルマン語派に見られる。しかし、スラブ語では少なく、ペルシャ語や中国語ではまったく、[gl] 音は見られないと報告している。ところで、日本語ではどうであろうか。日本語のオノマトペの中には英語と対応関係が見られるものがある。田守 (2002:168-171) は、英語の *fl-* で始まる語と日本語オノマトペの中には、次のような対応が見られるとし、次の例文を挙げている。

(1) a. The national flag is *flapping* gently in the wind.

b. 国旗が風にひらひらなびいている。

(2) a. Kazuo lifted his notebook and began *flicking* the pages.

b. 和夫は自分のノートを取り上げひらひらさせてみせた。

(3) a. Cherry blossoms *flutter* down in the breeze.

b. 桜の花が風にひらひら散る。

また、英語の *gl-* と日本語オノマトペの「ぎらぎら」(gira-gira) が対応しているとして、次の例文を挙げている。

(4) a. The gas tanks on the shore *glared* in the sun.

b. 海岸のガスタンクがぎらぎら光っている。

(5) a. The leaves of the trees *glittered*.

b. 木々の葉はぎらぎら光っていた。

(6) a. The water in the canal *glinted* sharply and was too bright.

b. 掘割の水がぎらぎらしてまぶしかった。

以上、英語特有と考えられていた語頭子音 *gl-* が日本語にも共通の音象徴として見られることを見た。ここで、これらの共通性が単なる偶然なのか、それとも、普遍性によるものかという問題が生起する。もし音象徴が個別言語に特有のものであると仮定するならば、音象徴の音声と意味との関連は恣意的になり、類像性の問題は起こらない。既に見たように、音象徴の現象はゲルマン語派においては、かなり共通に見られる現象であった。音象徴が普遍性を持つと考えるならば、これまでの各言語に見られる共通性はその根拠を説明することができる。ここに、音声と意味が動機付けられているという類像性はその存在意義を持つことになる。音象徴の音声的基盤である示差的特性は、いわば、音の DNA であり、すべての音声形式が根源的に持っているものである。今後、音象徴の普遍性を確立するためには、音響音声学による音象徴の音声的基盤のデータを収集し、音象徴効果⁵を検討する必要がある。その際、音象徴の普遍性はすべての言語に同程度に見られるものではなく、言語間の類縁関係、音体系、音節構造などに依存していることに留意しなければならない。

4. おわりに

本稿では、音象徴と類像性の関係を英語語頭子音 *gl-* に焦点を合わせながら、音象徴とは何か、を定義し、これまでの音象徴研究の概要を Jespersen (1922)、Bloomfield (1933)、Ullman (1962)、Lyons (1977) を通じて見てきた。次に、語頭子音 *gl-* をもつ語の多義性を Sadowski (2000) の研究を中心にしながら、音象徴の類像性と普遍性について考察した。最後に、音象徴の類像性は存在意義をもつこと、音象徴の普遍性を確認するためには、音象徴効果の音響音声学的研究が必要であることを強調した。

注

- 1 Ferdinand de Saussure (1916) は、言語記号は所記 (signifié) と能記 (signifiant) の性質をもち、両者は恣意的である、と考える。すなわち、「言語記号」と呼んでいる単語の能記と所記、つまり、音と意味との関係は、実際には何の関係もないということである。

「我々は言いたい:能記は無縁 (immotivé) のものである。つまり、所記との関係において恣意的である。所記との実在において何らの自然的契合を持たない。」 [小林英夫訳 (1967²⁰) 『言語学原論』(改訂新版) 岩波書店、93 頁]

- 2 Crystal (1992:252) は、英語では teeny (ちっちゃい)、little (小さな)、bit (少し)、slim (ほっそりした)、-ing (小さなものを意味する接尾辞) 対 large (大きな)、vast (巨大な)、grand (壮大な)、フランス語では petit (小さい) 対 grand (大きい) の例を挙げている。さらに、Crystal は、Morris Swadesh (1909-67) の例を引用し、多くの言語で [i] のような母音は近さ (これ) を表し、[a] や [u] のような母音は遠さ (あれ/あなた) を表すのに用いられていることを指摘している。

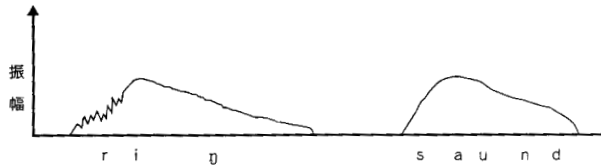
	これ [i]	あれ [a] /あなた [u]
チヌーク語	— i —	— u —
タミル語	idi	adi
タイ語	nii	nan
ビルマ語	dii	thoo

また、多くの言語で「母」を鼻音で表し、「父」を調音位置が前方の子音で表す傾向がある。

	母	父
ヘブライ語	ima、em	aba、av
フランス語	mere、mama	pere、papa
タミル語	ammaa	appa

- 3 Jacobson (1979:201)、Jespersen (1922:399)、Reid (1967:24) 参照。

4 井上 (2000:30) は、次のように図示している。



5 田守 (2002:174-175) は、日本語においても英語においても、「滑らかさ」を表す多数の語に [s] が含まれていて、[s] と「滑らかさ」の音象徴的対応があり、この時、[s] が「滑らかさ」の音象徴効果をもち、これは [s] が音声的特徴の1つである「連続音性」、すなわち、[s] を発音するとき、空気が口から出てくるのを完全に阻害するような閉鎖がない、という特徴によると述べている。

参考文献

- Bloomfield, L. (1933, 1967⁹) *Language*, London: George Allen & Unwin.
[三宅 鴻・日野資純 (訳) (1965) 『言語』大修館書店.]
- Chomsky, N. and M. Halle. (1968) *The Sound Pattern of English*, New York: Harper and Row.
- Crystal, D. (1995) "Sound Symbolism" *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press, 250-53.
[風間喜代三・長谷川欣祐 (監訳) (1992) 『言語学百科事典』大修館書店.]
- Crystal, D. (2003) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, fifth Edition. Basil Blackwell.
- Haiman, J. (1980) "The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation," *Language* 56(3): 515-40.
- 井上恭英 (2000) 『英語の認知メカニズム』晃洋書房.
- Jacobson, Roman, Gunnar M. Fant and Morris Halle (1965) *Preliminaries to Speech Analysis: The Distinctive Feature and Their Correlates*, Cambridge Mass.: M.I.T.
- Jespersen, O. (1922, 1964¹²) *Language: Its Nature, Development and Origin*, London: George Allen & Unwin.
- Jacobson, R., and L. Waugh (1979) *The Sound Shape of Language*, Brighton: The Harvester Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*, Vol. 1 Cambridge: Cambridge University Press.
- Peirce, C.S. (1982-93) *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Edition*, (ed. by M.H. Fisch and C. Klosel) Indiana Univ. Press.
- Reid, D. (1967) *Sound Symbolism*, Edinburgh: T. & A. Constable.
- Rhodes, R. & J. Lawler (1981) "Athematic Metaphors," *C L S* 17.

Sadowski, P. (2000) “ The iconicity of English gl-words” In Olga Fischer and Max Nanny (eds.)
The Motivated Sign, Amsterdam: John Benjamins.

Saussure, Ferdinand de. (1916) *Cours de linguistique generale*, Payot, Paris.

[小林英夫 (訳) (1967²⁰) 『一般言語学原論』 岩波書店.]

田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』 岩波書店.

辻 幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.

Ullman, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*, Oxford: Basil Blackwell.

<英語辞典>

OED, Oxford English Dictionary. J.A.Simpson, E.S.C. Wiener (eds.) (1989) Oxford:Clarendon Press.

『新グローバル英和辞典』 2 版 .(2002) 三省堂 .